

表 8-5 第 2 次運動の外部の主要なアクター

レベル	おもなアクター (活動開始時期・規模など)	おもな活動内容
① 那賀川 中下流域	細川内ダム反対草の根同志会 (1994年10月; 1130人)	町議会への反対決議の陳情、県議選立候補者への公開質問、ピラ配布、ノボリの設置
	細川内ダムに反対する那賀川下流域住民の会 (1994年10月; 250人)	学習会、見学会、阿南市長や市議への公開質問、ピラ配布、街頭宣伝
	細川内ダムを考える日和佐の会 (1995年3月; 40人)	学習会、看板設置、現地見学
	細川内ダム問題を考える海潮の会 (1995年5月; 20人)	学習会、現地見学
② 徳島市 (県庁所在地)	細川内ダムに反対する小松島市民の会 (1995年12月; 55人)	学習会、現地見学
	細川内ダムに反対する徳島市民の会 (1995年2月; 350人)	街頭宣伝、署名活動、知事への反対申し入れ、イベントやシンポの開催
③ 関西圏 や西部圏 など県外 都市部	細川内ダム建設反対徳島県連結会 (1995年10月) = ①の5団体と村内の同志会・守る会の2団体で構成	立木トラスト運動、シンポ開催、建設省・県への中止申し入れ、参院選立候補者への公開質問
	ダム・堰にみんなの意見を反映させる会 (1995年7月)	シンポの開催など
	徳島自治体問題研究所・徳島大学の研究者	シンポの開催、現地調査、メディアを通じた世論喚起
	よいしよきとうむら (1995年12月; 300人) = ③のレベルと重複	第三セクター「きとうむら」の支援 (物産購入)、木頭村との交流
徳島県 や西部圏 など県外 都市部	大阪弁護士会所属の井口弁護士ら (1994年8月)・日弁連	ダム阻止条例の作成支援、現地視察、シンポ開催
	那賀川エコ・ツーリング実行委員会 (1995年12月)	体験学習、シンポの開催、現地との交流
	木頭村の未来を考える会 (1995年8月; 政野淳子氏主催のババコン通信「ダム日記」が母体)	インターネットを使った細川内ダム問題の開示と情報発信、現地交流
	保母武彦・島根大学教授、五十嵐敬喜・法政大学教授、鷲見一夫・新潟大学教授など大卒研究者	木頭村総合振興計画の策定支援、情報提供
	アウトドアライター (天野礼子氏や野田知佑氏など)	情報提供、メディアを通じた世論喚起
	草川昭三氏ら国会議員	建設省へ質問主意書の提出、国会質問、現地視察
	水源開発問題全国連絡会 (1993年11月)	情報提供、現行ダム計画の分析

⇒2000年11月に細川内ダム計画は正式に中止。環境運動の大きな目的は達成。

3. 巨大ダム建設計画中止後の地域社会と地域再生

・「ダムに頼らない村づくり計画」の理念と実際

地場の農産物 (柚子) を用いた加工食品づくりの会社「きとうむら」(第3セクター方式)

- ・ダム建設計画を進める建設省や徳島県に対抗する意味合い
- ・村長 (当時) ら村の幹部が主導して1996年に設立

だが、

- ・経営の不慣れによる赤字体質とパートナーを組んだ民間会社による詐欺
- ・村づくり計画の理念 = 「内発的発展」からズレた当初の商品構成
- ・累積化する債務と村税投入に対する一部村議の反発、助役の自殺

などによって一時は経営危機に。

背景として、

- ・流域住民 (特に下流部) の受益・受苦認識の多様化
 - ・水没予定地域 (木頭村) の住民の生活経験
- = 小見野々ダムなど流域にはすでに大小5つのダムが存在し、ダムの被害・弊害が顕在化
- cf. 岡山県奥津町の苦田ダム問題など

表 8-8 「きとうむら」の売上げと収支推移

	(単位: 万円)		
	売上げ	単年度収支	累計収支
1996年度	4,498	▲2,053	▲2,053
1997年度	6,634	▲1,216	▲3,269
1998年度	4,843	▲3,753	▲7,022
1999年度	7,213	▲2,802	▲9,824
2000年度	9,501	▲657	▲10,481
2001年度	10,655	29	▲10,452
2002年度	10,188	21	▲10,431

(出典)「徳島新聞」(1999年9月15日) および「きとうむら」作成資料による。

⇒現在は、村外の人的・物的資源に依拠しながら、経営の改善と再建への取り組みが続いている。

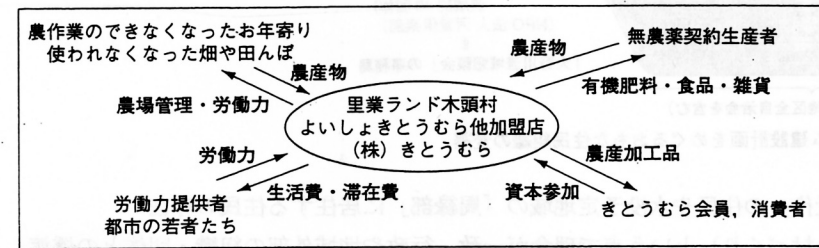


図 8-3 「きとうむら」をめぐる村内外ネットワーク構造

(出典)「きとうむら」作成資料による。

・地域産業構造の変質

→公共事業依存型産業構造と根強い「草の根保守主義」の存在

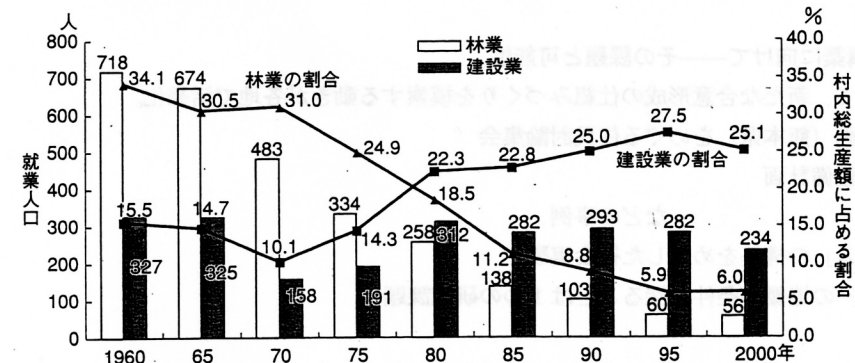


図 8-4 木頭村における産業構造の変質

・長期化し累積した地域社会の紛争とその傷跡

→頻発する村議のリコール合戦、助役の自殺、村内を二分した村長選挙 (2001年) など

上記の「負の遺産」は、「きとうむら」の行方にも深い影を落としている。

・木頭村の住民にとっての「きとうむら」

細川内ダム計画反対闘争のシンボルであり、前村長時代の象徴でもある。

⇒ダム建設計画をめぐる対立の構図が地域再生を目指す取り組みに投影。